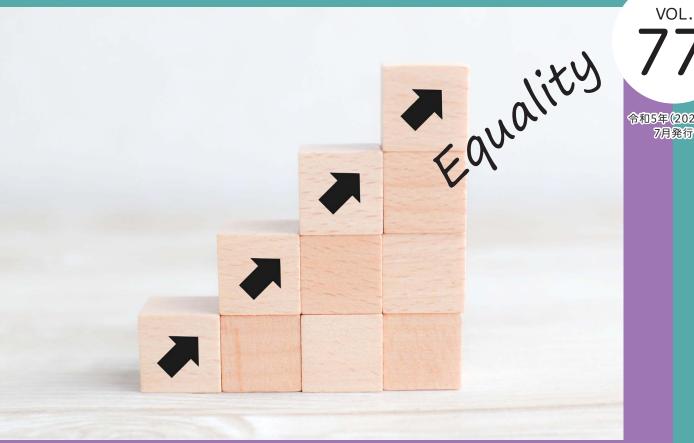
区民と創る港区の男女平等参画のための情報誌





令和5年(2023年)

若者が進めるジェンダー平等 特集

若者が描くジェンダー平等への歩み方 ジェンダー平等社会

リーブラで活動する団体紹介 男女平等推進団体『港ダンスサークル』

2022年度 企業・学校・保育園/幼稚園向け出前講座 受講後の声 2023年度 企業・学校・保育園/幼稚園向け出前講座のご案内



特集 若者が進めるジェンダー平等

コロナ禍で直接的な関わりが制限される中でも、若者を中心にSNS等を活用し、広く、多くの人へ、ジェンダー平等社会の実現を目指して積極的な発信をしている姿が見られました。 今回、ジェンダー平等に向けた取組を進める一般社団法人ATHENA (アテナ) 代表理事の宇野唯奈さんに、その思いをうかがいました。



若者が描くジェンダー平等の未来への歩み方

ジェンダー問題との出会い

私がジェンダー問題に興味をもち始めたのは、高校時代をアメリカで過ごした時でした。15歳から、30カ国以上から来る留学生と一緒に寮生活をした4年間はとても刺激的で、その中でも1番驚いたのが、同年代の女の子たちが間違っていると思ったことに対してしっかり指摘をすること。例えば男の子たちが「女の子だから料理できるようにならなきゃ」と発言をした時、周りの女の子たちは揃って「それは間違っている」「料理は男の子にとっても大事なスキルだよ」など、些細な発言や冗談に対しても差別的だと感じた時は指摘していて、その光景を見て私は初めて、「なるほど、これは性差別なんだ」と気づくようになりました。

長期休業で日本に帰国すると、テレビ番組では女性アナウンサーが男性MCを立てるように一歩後ろにいるような光景が当たり前だったり、友達との会話の中でも、ジェンダーの固定概念を押し付けるような発言に対してただ周りは笑っていたりと、日本のジェンダーギャップに違和感を覚え始めました。

そこからジェンダー問題についてもっと知りたいと思うようになり、本や動画を通して日本や世界のジェンダー問題について学び始め、他の社会問題にも強く結びついていることや、ジェンダー問題は男性が直面する問題でもあるということに更に興味をもち、高校を卒業し日本に帰国した後も、大学の授業や独学を通して学び続けていました。

アクティビストとしての第一歩

改めて日本での生活を送る中、ジェンダー問題に関する知識が深まると同時に、日本でのジェンダーギャップに対する違和感は強まるばかり。その中でも特に気になったのが、メディアや日々の会話の中で毎日のように触れるジェンダーの固定概念や差別的表現・発言などに対して、周りの人、そして社会が問題視をしていないことでした。その時気づいたのは、私もきっと海外に住む経験がなかったら、日本の現状に対して違和感をもっていなかったということ。「女性・男性はこうあるべき」という固定概念や性別役割分担意識は日本社会に深く根付

いていて、その環境で生まれ育ったため見えてこなかったものに、日本を離れて初めて気づけました。だからこそ、同じような気づきを1人でも多くの方にシェアできたら日本は少しでも変わるかもしれない。そのような想いから、大学生の時にSNSでジェンダー問題や自分の考えについて発信するようになりました。

後に「本格的にジェンダー問題を学びたい」という想 いが強くなり、大学卒業後、ロンドンの大学院へ進学 し、ジェンダー学の修士号を取ることを決意。大学院に 通いながらも発信を続けていくうちに徐々にジェンダー 問題に関心をもつ方からメッセージをいただくようにな り、その中で多かったのが「私もジェンダー問題に興味 があるけど、学べる場所がない」「社会問題について一 緒に話せる友達がいない」「ジェンダー平等に関連する 活動をしたいけど、何をしていいかわからない」などの 声でした。アメリカでは周りの友達やクラスメートと政 治や社会問題について話すのが当たり前で、高校卒業後 の進学先でも国際的な環境は続き、ジェンダー問題につ いて学ぶ機会も、話す機会にも恵まれていたため、これ らの声を通して「若者の政治離れ」や「社会問題への関心 の低さ」などの日本の課題を実感し、自分に何か出来る ことはないかと考えるきっかけになりました。

自分にできるアクションを考え、まずは「学べる場所がない」という課題を解消すべく、ジェンダー問題について学べるようなアカウントをインスタグラム上で作りました。まだまだ日本ではフェミニズムに対して「過激」「男嫌い」など批判的なイメージが強いと感じていたため、"Feminism for Equality"というアカウント名にすることで「フェミニズム=平等を目指しているだけ」という認知を広めると共に、海外のジェンダー問題だけでなく、日本に住んでいる方にも自分ゴト化していただけるような発信を心がけました。

学業をこなしながら1人で運営していたアカウントだったので、マイペースに続けていた発信でしたが、「Feminism for Equalityでの発信をきっかけにジェンダー問題について興味をもつようになった」などの声を聞くようになり、後に企業や行政からセミナー講演などの依頼をいただくなど、今のアクティビティストとしての活動の第一歩となりました。

活動の本格化

活動を続けて2年ほど経った頃、活動を続けていく上 での目標を見失った時期がありました。「Feminism for Equalityが学びの場所になっている」という嬉しい声を いただく中、どこか心の底からやりがいを感じられてい ない自分がいた際、もう一度学生時代にいただいたメッ セージを読み返し気づいたことが、「ジェンダー平等に 関連する活動をしたいけど、活動できる場がない」とい う声に応えたいということ。私は1人で活動をしたいの ではなく、昔の自分のように「何かしたいけど、どこで何 ができるかわからない」と思っている方が活動できる場 所を提供したいという新たな目標に辿り付き、後に15名 のメンバーを迎え、「一般社団法人 ATHENA」を設立し ました。ATHENAを通して行っている発信はFeminism for Equalityの時と変わらず、日本の方々にも自分ゴト 化していただけるような内容。より多くの方に興味を もっていただけるよう、アート・ファッション・スポー ツ・他の社会問題など、様々な分野を通して、ジェン ダー問題を知ってもらう機会を提供しています。



ジェンダー平等を目指し活動する ATHENA のメンバー

そして活動を進める中、「ジェンダー問題に限らず他の社会問題にも興味がある方々に、学べる環境や一緒に話し合えるコミュニティが必要なのではないか」と考えた結果、社会問題全般について一緒に学べるオンラインサロン "Evolve" の運営も始めました。環境問題、政治、LGBTQ+など、毎月異なる社会問題にフォーカスを当て、専門家によるセミナーやメンバー同士でのディスカッションなどを通して「学ぶだけでなく行動に移す」をコンセプトにしていたEvolveでは、コミュニティ内で繋がったメンバー同士で一緒に団体を始めるような方々もいました。1人で運営していたということもあり、他の仕事が忙しくなる中、両立のバランスが難しくなり、残念ながら2年ほどでオンラインサロン自体は終わってしまいましたが、Evolveをきっかけにより幅広い分野に興味をもってくださったり、個人や団体でその後も活動

を続けたりする方々の姿を見て、コミュニティのパワー を改めて実感する貴重な経験となりました。

一発信者としての自分

ATHENAを通してジェンダーに関する活動を続けつつ、自身のSNSではジェンダーに限らず、メンタルヘルスやサステナビリティなど他の社会問題についても発信し、また、フィットネストレーナーの仕事もしているため、フィットネスのコンテンツを通しセルフラブやボディポジティビティに関するメッセージも伝え続けています。フィットネストレーナーとしての自分や、セルフラブについてのコンテンツに興味をもち、SNSを見始めてくださった方や、友人・知人から、「私のインスタグラムをきっかけにジェンダー問題について知った・興味をもった」というお声をいただく度に、ジェンダー問題に限らず幅広いトピックについて発信を続けることで、より多くの方にジェンダー問題について考えていただくきっかけになると実感しています。

ATHENAの活動でも、個人の発信でも「自分ゴト 化」にこだわる理由は、個人的影響がない限り社会問題 は関係ないものだと思っていたり、「どうせ変わらな い」と思っていたりする人が多いと感じるから。これが 日本で社会問題に興味をもつ若者が少ない原因だと考え ています。もし「こういう社会になってほしい」と思う 部分が少しでもあるなら、何かしらのアクションを取っ てみて欲しい。投票しに行く、マイボトルを持ち歩く、 「彼氏・彼女」ではなく「パートナー」などジェンダー ニュートラルな言葉を使うなど、どんなに小さなことで もいいから、「どうせ」ではなく「もしかしたら」の可能性 を信じてほしい。誰もが人に影響を与えたり、社会や地 球をより良くする力をもっていると思うからこそ、私自 身がその力を信じて行動し、自分のライフスタイルや活 動内容をSNSでシェアすることが、一アクティビスト、 そして一発信者として出来ることだと信じています。

執筆者プロフィール

字野 唯奈 さん

高校時代をアメリカにて過ごした際にジェンダー問題をはじめとする社会問題に興味を持ち始め、上智大学 国際教養学部において政治学学士号取得、ロンドン大学においてジェンダー学修士号を取得。



「『女の私』『男の私』ではなく、『ただの私』でいられる社会」を目指し取り組む一般社団法人 ATHENAの代表理事を務めながら、個人で企業や行政を対象としてセミナー講演も行う。

SNSではジェンダー問題に限らず環境問題やメンタルヘルスなど幅広いトピックについて発信し、インフルエンサーとしても活動。フィットネストレーナーとしての顔も持ち、NIKEオフィシャルトレーナー、ピラティスインストラクターとして活動し、主に女性を対象にトレーニング・ピラティス・ストレッチなど、女性特有の悩みに寄り添うセッションを提供。ボディ・ポジティビティやセルフラブなど、フィットネスを通した女性のエンパワーメントにも取り組む。

女子・ジェンダーマイノリティユースへの 理系教育推進で切り開くジェンダー平等社会

テクノロジー分野のジェンダーギャップ解消を目指し、女子およびジェンダーマイノリティの中高生へより多くのIT・STEAM (理系分野) 教育を届けているNPO法人Waffle (ワッフル)。中高生の段階から技術とふれあう機会を提供し、進路に関わるエンパワーメントを行う、当該団体の代表・田中 沙弥果さんにお話を伺いました。

女性技術者不足とその問題点

経済産業省の調査では、日本のIT人材は、2030年までに80万人足りなくなると言われており*1、人材の育成が必要とされています。しかし、日本のIT産業では女性技術者は20%~30%と低い状況です。技術者の男性への偏りは女性やマイノリティの視点が反映されない科学技術の問題を生じさせる一因につながります。

海外では、ある企業の採用活動で、書類選考をAIが行うシステムをつくったところ「女子大生」の評価が低くなるという差別が起きました。これは、AIに取り込むデータの大半が男性に偏っていたこと、システムの作り手が男性でありチームに多様性がなく、誤りに気づくことができなかったことが原因でした。このように科学技術に多様な視点が反映されなければ、マイノリティへの不利益が生じてしまうことがあります。

女子中高生が理系選択を避ける現状

日本の女子学生は数学・科学スキルで世界トップクラスにも関わらず、OECD (経済協力開発機構) 加盟国の中でも工学部の女子比率が15%で最下位であり*2、生徒の学習到達度調査「PISA (2018)」のICT関連の仕事に興味がある女子の割合も3.4%で最下位です。仕事への興味が低いだけでなく、工学部・理学部への進学に結び付いていない現状があります。しかし、IT分野は男女の賃金格差が少なく、フレックスやテレワークなど働き方も選べ、ライフイベントと両立しやすい面があります。女性およびジェンダーマイノリティの人達にとってよい職業選択肢の一つだと考えられます。IT分野と中高生・大学生の進路・就業につなげることが課題です。

家庭や学校の「ジェンダーステレオタイプ」の影響

女子が理系に進学しない理由は、能力の問題でなく「理系=男性」というジェンダーステレオタイプが外部環境に強くあるためと考えられます。まず、学校現場で数学を教える中学・高校の教員の70%程度が男性です*3。内閣府の調査では女性教員に理数系の教科を教えてもらった場合、それを受けた女子生徒は、理系を志向する割合が11%増えると言われており*4、身近で教える教員のロールモデルとしての影響が大きいと言えます。

また、保護者による影響も大きいです。アジア圏内の家庭では、保護者が女子に理系教育を促すことが、男子の場合より20%低いと言われています*5。例えば、科学教室やプログラミング教室を男子には勧めるが、女子には男子ほど勧めないという傾向があります。

これらから、Waffleでは、生徒にとって身近で影響のある保護者や教員により、理数系科目の向き・不向きのイメージ、性別役割意識などのジェンダーステレオタイプがつくられているため、その段階の中高生へのアプローチが必要だと考えました。



NPO法人Waffleの主な活動

私たちは、①女子およびジェンダーマイノリティの中高生向けの国際的なアプリコンテスト「Technovation Girls」の国内参加者の支援、②ウェブサイト開発のスキルとプログラミング学習コミュニティを提供するオンライン・プログラム「Waffle Camp」、③大学生・大学院向けプログラム「Waffle College」、④企業とともにITに興味をもってもらうイベントの開催、⑤政策提言などを行っています。

Waffleの教育プログラム・学習環境の特徴として、 ①参加者自らが作りたいものを設定して取り組む学習スタイル、②ロールモデルとなるエンジニアから進路・職業選択のことや働き方などの話を聞いてキャリアを考える機会があること、③教える先生(メンター)は女性・ジェンダーマイノリティの大学生が多いことが挙げられます。

Waffleの提供する講座の中では、ジェンダーバイア スを取り除いた学習環境のなかで、エンパワーメントさ れるような環境で学び、将来を考えてほしいという思いがあります。メンターに対してもジェンダー研修などにも力を入れ、受講生への声掛けや接する態度などに気を配っています。「女の子なのにすごいね」「高校生なのにこんなことするんだ」などラベリングしてほめることはむしろ受講生の自信をなくすことにつながります。「女の子」などジェンダーで括るような発言を避けることや、可能性をさらに引き出すような声掛け等を行うように伝えています。

アプリ開発を通した中高校生の成功体験

Waffleが日本リージョナルアンバサダーを務める Technovation Girlsの過去の参加者の中には、自分が関心の高い社会問題をテーマにしたアプリを作り、企業賞を受賞した人がいました。「初めて大きな企業の人に認められた!!」と自信がついた様子でした。その賞をきっかけに、様々な実践的なITプログラムに参加するようになり、海外の有名大学でコンピュータ・サイエンスを専攻することが目標となり、留学のためのスカラシップに挑戦するなど自分の道を切り開いています。

また、学校の校則を生徒の立場から問題提起したいと 意見収集するアプリを開発した生徒もいました。自分が 変えたいと思う校則、例えば「地毛が茶髪なのに、わざ わざ黒に染めないといけないのか」など、同じような意 見が集まった場合、署名を先生に議題として挙げるな ど、生徒主体の校則の見直し「ルールメイク」につなが るようなアプリです。

Waffleの活動は、将来を通じて、ITリテラシーを身につけ、ITツールを駆使して社会課題や未来を切り開く、きっかけや後押しになっています。



中高生を取り巻く社会・学校側の構造的な 問題への解決を目指した政策提言

政府の「経済財政に関する基本方針(骨太の方針)」や 各省庁の有識者会議などでの提言にも取り組み、政策の 推進に貢献しています。

経済産業省「デジタル関連部活支援の在り方に関する検討会」では、Society5.0時代における産業競争力の源泉になり得る、デジタル関連部活に所属する生徒一人ひとりのデジタルスキル等の向上を図るため、産業界が中

心となって支援することの在り方等について議論しました。Waffleは、女子およびジェンダーマイノリティの中高生が参加しやすいような企画・設計について提言しました。

田中さんが描く、ジェンダー平等とその歩みについて

工学部の女子割合の伸び率から計算したところ、男女比が50:50に到達するのには117年かかることがわかりました。私は、それを10年でも、20年でもなんなら50年でも早めたいです。

平等ではない社会にいたくない、待っていたくないという気持ちが強く強くあります。私自身も、ジェンダーギャップがある状態に慣れ過ぎていることに、ジェンダーについて勉強するまで気づきませんでしたが、ずっと違和感を持っていました。周りを見ていても、なぜ、女性ばかりがアシスタント職に就くのか。なぜ、女性が宴会の場でお酌を強要されるのか。働くことが好きなのに、なぜ外で働けないのか。そういう違和感が常にありました。

Waffleの仕事を通して、このような構造的な問題を知ると、間接的に差別されすぎている現状に気づかず、声を挙げることすらためらいがある風潮に怒りさえ感じています。ジェンダー不平等な社会を終わらせるためには、IT分野への女性参画が必要だと考えています。IT分野の世界に女性やマイノリティを積極的に輩出することで、社会を変えるリーダー側に立つことができます。社会を変える側になる人間を増やさないといけないと思っています。女性やジェンダーマイノリティのリーダーを多く輩出し仲間をつくっていくことで、ジェンダー平等を目指していきたいです。

- *1 経済産業省「IT人材の最新動向と将来推計に関する調査結果」参照
- *2 UNESCO Institute for Statistic 2017
- *3 学校教員統計調査(令和元年度)教員個人調査中学校,高等学校「担任教科別中学校(高等学校)教員免許状別教員構成」参照
- *4「女子生徒等の理工系進路選択支援に向けた生徒等の意識に関する調査研究」(2017年度内閣府委託調査・株式会社リベルタス・コンサルティング)
- *5 OECD生徒の学習到達度調査 (PISA2018) 「Insights and Interpretations」

執筆者プロフィール

田中沙弥果 さん

NPO法人Waffle 代表

1991年生まれ。2019年に一般社団 法人Waffleを設立(現NPO法人)。 2020年Forbes JAPAN誌「世界を変



える30歳未満30人」受賞。内閣府 若者円卓会議 委員。経産省「デジタル関連部活支援の在り方に関する検討会」有識者。2022年より公益社団法人ガールスカウト日本連盟の評議員

リープラで活動する団体紹介

男女平等推進団体 『港ダンスサークル』

リーブラで活動を行っている「男女平等推進団体」「男女平等 学習団体」のみなさんをご紹介します。

今回、お話をきいた「港ダンスサークル」は20~35歳の若い層を対象とした社交ダンスサークルです。「社交ダンス」は、「ボールルームダンス(舞踏室で踊るダンス)」の一つで、その特色は必ず「ペア」で踊ることです。男性がダンスの方向や動きを決める「リーダー」、女性がそれに美しく追随する「パートナー」であることが一般的で、公式の競技会の出場資格に規定されていました。性別役割意識が強い社交ダンスにおいて、誰もがダンスを楽しめるようジェンダーや人権に配慮する「港ダンスサークル」の取組を紹介します。

● 団体設立の経緯~安心して続けられる場を求めて

社交ダンスは、練習場や相手を探したり、高額なレッスン料や衣装が必要であったりと、続けていくことが難しい趣味です。近くで「安心」してダンスを続けられる場が欲しいと思っていた港区のメンバーで2015年に団体を設立しました。

なぜ「安心」という言葉が出てくるかというと、社交ダンスは性別によりダンスの役割と練習相手が固定されており、人間関係を適切に築けないことがあるからです。まず、主に「リーダーを務めることが多い」男性が圧倒的に少なく、「リーダーと組みたい」女性の立場が弱くなりやすいのです。「組む女性は他にもいくらでもいる」とひどい扱いを受ける例もありました。また、「ペアを組んだ相手以外とは練習しない、踊らない」といった慣習があるため、相手との関係に必要以上に気を遣わなくてはなりません。相手との関係が悪くなった際、他に練習相手がいなくなり、ダンスを続けられなくなってしまうのです。

このように社交ダンスは、性別による力関係やペアの相手への依存が起こりやすく、安心してダンスを楽しめない状態でした。そこで私たちの団体は、性別にとらわれずダンスの役割を入れ替えることで、これらの課題を解消し、安心してダンスが楽しめる活動に取り組んでいます。

● 活動・運営の工夫~ミナダンカップの開催

従来の慣習を変えた取組の1つとして、設立同年11月から 団体メンバーの成果発表の場「ミナダンカップ」があります (2023年5月で15回目を迎えました)。この大会では、一般的な「男性=リーダー、女性=パートナー」を入れ替えた「逆転ペア」や、同性同士で組む「同性ペア」の参加を認めています。 そして、「何人とでもペアを組んでいい」という「試合は決まった相手と出る」という概念を変えるルールにしました。

「ミナダンカップ」をつくるにあたっては、大きな苦労がありました。この「安心」を重視した取組も、ダンサーや関係者に魅力的な大会と認められなければ、個人の遊びの集まりと扱われ、活動も広まっていきません。そこで、審査の体制を整え

ました。ボールルームダンスは、技術の出来を点数化する点数制ではなく、姿勢や動きの芸術性を複数の審査員で評価します。ダンサーにとって評価は、芸術として認められているか否か、また自分たちが成長していくために大変影響のあるものです。その体制が出来ていないと参加する魅力も感じられません。そのため、審査員の人数、立場、専門とする種目などを調整し、誰もが納得できる評価システムを構築することに努めました。

システムだけでなく、審査員の価値観を変える努力もしました。「男性がパートナーなんて美しくない」といった性別前提の従来の価値観をもつ審査員に「男女の枠にとらわれず、純粋にダンスを見てほしい」と方針を説明しました。また、解説では「男女」の表現は使わず、「リーダー・パートナー」の表現のみに統一しました。どのようなペアでも性別にとらわれずフェアにダンスについてやり取りできる場にしています。

この活動は、様々なところに影響していると感じます。普段の活動では、女性リーダーが楽しそうに踊る姿や、役割を入れ替えて長く楽しめるようになった姿が見られます。また、ミナダンカップまでは、審査員が9名もいるような大きな大会での逆転ペア・同性ペアの参加受け入れはありませんでしたが、ミナダンカップの魅力が広がり、大きな大会でも受け入れる流れが生まれました。2022年から競技規則に、性別を問わず自身が申告した役割で出場できることが明記されています。



「ミナダンカップ」で社交ダンスを楽しんでいるダンサーたち

● 今後の抱負~ダンサーの人権を大切にして

設立当初から「社交ダンスを楽しむ人が安心して続けられること」を大切にしています。そのため、既述のジェンダーに関する問題だけでなく、肖像権に関する問題にも取り組み続けています。大会に出場するには、主催者へ肖像権譲渡に同意しなければなりません。動画の扱い方は主催者次第で、公開された動画が個人の特定や攻撃の原因になることがあります。しかし、動画の存在自体が悪ではなく、ダンスのレベル向上には不可欠なものです。「ダンスにおける動画の重要性と、ダンサーの人権に配慮した肖像権の両立」に当初より取り組んでいます。難しい課題ですが、このようにダンサーの人権を大切にした場があることで、社交ダンスを続ける人が増え、日本の社交ダンス技術も向上していくと考えます。社交ダンス界

の発展につながるため、ジェンダーや人 権被害の苦しみを受けず、続けていける 環境作りに今後も取り組んでいきたい です。

お話をうかがった方

港ダンスサークル 代表 KARORI さん





2022年度 リーブラ出前講座 受講後の声



リーブラでは、男女が平等に参画できる社会の実現にむけて、港区内の企業、学校、保育園・幼稚園を対象に 「出前講座」を行っております。2022 年度の受講された方の感想を紹介いたします。

企業名 キオクシア株式会社(区内製造業)

対 象 管理職クラス社員 292名

講座名 「心理的安全を高めるコミュニケーション」

方法・内容 オンライン 全体90分 (講義70分、質疑応答10分、事務連絡10分)

心理的安全性とはどのようなことか、チームワークと心理的安全性、心理的安全性の育て方、 リーダー・メンバーに必要な行動

講座を終えての感想

当社はフラッシュメモリ、SSDの開発、製造、販売を行っています。1987年NAND型フラッシュメモリを発明し、2017年に株式会社東芝から分社。2019年10月にキオクシア株式会社に社名変更しました。グローバルでの激しい競争の下、新規技術開発によるイノベーションの継続と大量かつ安定した製品供給を両立する必要があり、各部門では業務上のプレッシャーが大きくなっています。従業員エンゲージメント調査結果によると、「心理的安全性」に関する質問への好意的な回答は、改善



傾向にあるものの、他社平均よりも低いことが分かりました。そこで、役職者に「心理的安全性」を学ぶ機会を提供するため、リーブラの出前講座を申し込ませていただきました。

本講座では、「心理的安全性の定義」、「心理的安全性を阻害する「対人不安」とその帰結」、「心理的安全性を育てる具体的な事例」等について学びました。当社では多様性推進に取り組んでおりますが、高い心理的安全性があって初めて多様性が大きな力を発揮し、ブレークスルーに繋がる事が具体的なデータに基づいて示され、目から鱗が落ちる思いでした。今回の講座は「心理的安全性」の重要性に関して各組織のリーダーが共通認識を持つ大きな一歩となったと考えております。この一歩に留まらず、「心理的安全性」が確保され、性別や属性によって感じる「心理的安全性」に差のない組織を目指します。

キオクシア株式会社 人事総務部 人材開発担当 輿水 良(こしみずりょう)

団 体 名 NPO法人 あい・ぽーとステーション

対 象 子育で・家族支援員(子育で支援員) 59名

講座名 保育現場で学ぶ「性」のこと

方法・内容 オンライン 全体90分 (講義80分、事務連絡10分)

性に関することは「人権」であること、ユネスコ『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の包括 的性教育とは、自分の性の価値観を見つめる、子ども観をみなおす、事前質問への回答

講座を終えての感想

当法人は、子育て家庭の多様なニーズに柔軟かつ細やかに対応するため、「ひろば事業」「理由を問わない一時預かり」「派遣型一時保育」などの事業を行っております。それらに従事する「子育て・家族支援者(子育て支援員)」は、養成後も常に新しい知識の習得と質の向上のため学びを重ねており、今回の「出前講座」はこの研修の場として申し込ませていただきました。



以下は参加者の感想の一部です。

- ●昭和の教育で脆弱だった部分を学び、自分自身をアップデートすることができました。
- ●自分自身が受けてきた教育は「性」教育ではなく、「生殖」教育であったことが大きな気付きでした。
- ●お子さまとしっかりと向き合うことを心がけていますが、性に関わる事例に関してはさらっとかわすことが多いように思います。性についての教育を受けたこともなく、どのように対応すべきかわからないまま、流してきたことを反省しました。
- ●性について学ぶことは子どもの権利であるということ、日本では十分に保障されていないということを認識しました。
- ●いろんな子どもの気付きを受け容れ、丁寧に説明するということが大事なのだと思います。
- ●知らず知らずのうちに子ども達の人権を侵害していたことに気付きました。

学んだことを実践し、声かけや対応を見直していきたい等、多くの気付きが寄せられました。貴重な学びの時をいただきました。

NPO法人あい・ぽーとステーション 人材養成事業推進室 齋藤 洋未(さいとう ひろみ)

リーブラ出前講座のご案内 2023年度



港区内 企業向け

性別に関わらず、誰もが能力を十分に発 揮して働くことができる環境づくりを目 的とした講座です。

- ■企業に求められるSOGIE対応
- ■女性の活躍とキャリア形成
- ■職場のハラスメント防止と対応
- ■介護離職を防ぐための介護と仕事の 両立
- ■ワーク・ライフ・バランス
- ■職場におけるコミュニケーション
- ■子育てしながら働き続けられる職場 づくり など



港区内 学校向け

男女平等の大切さを理解し、子どもたち が個性と能力を十分に発揮しながら、お 互いを尊重することの大切さについて理 解を深めるための講座です。

小学校

中学校

■子どもへの暴力防止ワークショップ

など

■ジェンダー平等

- ■デートDV予防講座
- ■SOGIE促進講座
- ■自分の将来を守るために必要な性を 考える など



港区内 保育園・幼稚園向け

幼少期から男女平等意識を備え、子ども たちが性別役割にとらわれることなく、 子どもの個性を尊重し、可能性を引き出 せるようにする講座です。

- ■子どもへの暴力防止ワークショップ
- ■親子で学ぶ「性」のこと
- ■幼少期からのジェンダー平等 など

研修テーマは一例です。 内容詳細は、ご相談ください。





出前講座の詳細や過去の実績はHPでもご覧になれます。⇒

企業向け: 区内の企業 (先着7社まで無料 8社目以降 有料) 対 象

学校向け:区内の小・中学・高校、大学、短大、専門学校の学生・職員(2施設まで無料)

保育園・幼稚園向け:区内の保育園・幼稚園の職員、園児とその保護者(3施設まで無料)

※無料講座は年度内1回のみ。初めての企業・施設を優先しております。

会場貴社・貴校・貴園、もしくはリーブラでの開催可。

講師 分野に詳しい専門家をリーブラが派遣予定。

実施日時 2023年4月~2024年2月の期間内で、相談に応じます。

申込方法 随時受け付けております(電話→FAX)。詳細は、リーブラHPをご覧ください。

年度内に実施できる件数の上限に達した時点で、申込受付を締め切らせていただきます。

申込時に ①貴社·貴校·貴園のお名前 ②実施希望時期 ③希望の講座テーマ ④ご担当者名 ⑤ご連絡先(電話·Eメー ル)をお伝えください。



🏠 港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254

►https://www.minatolibra.jp/



アクセス

- JR「田町駅」東口(芝浦口)徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線「三田駅」A7出口 三田線「三田駅」A9出口 徒歩7分
- ちぃばす ◆芝ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」徒歩0分
 - ◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」徒歩4分
- 都営バス(田92・99)「田町駅東口」徒歩6分

АЭШП A7出口 四三田駅 リーブラ 西口 (みなとパーク芝浦 1階/2階) 田町駅 東口 芝浦港南ルート 芝浦1丁目停留所

港区男女平等参画情報誌「OASIS オアシス」77号 2023年7月発行 発行:港区立男女平等参画センター 指定管理者 株式会社明日葉